年號月　日　　内附　小寺市郎右衛門　判印
　　西村甚太夫　同

碓氷御關所御番衆中

一、申八月御參勤之砌、名立名立寺より、御道中方御用主付原田又太夫方迄使僧指越、歸申刻、境過書町奉行中より出可申筈候所、旅宿取不申、直に原田又太夫方迄來候に付、過書指遣候。然所境に而與力中詮議有之、會所奉行より出家之過書出申儀、跡々より通申格無之に付、決而難相通旨申候所、金森助右衛門承、使僧に樣子相尋候得ば、今般御參勤之御中休之儀相叶候而罷歸、其用意等仕候由使僧申候に付、左候へば通し不申候而は、近々御通に候故、其御點欠申所氣毒候間、助右衛門一人之了簡に而相通候。先此度はヶ樣に候。向後は決而相通不申由之事。

二八　御鷹・弓矢方之儀覺

一、御鷹之大緒、原田又太夫申二月十六日持參、大學殿に上之候所、御鷹方取次に可相渡由被仰候に付、左候はゞ指御紙面被遣候樣申達候得者、其儀には及間敷旨御申候へ共、ヶ樣之儀は跡々より御紙面被遣候間、無左候而は難相渡旨申達候へば、大學殿に御請取可被成旨御申に付、其儀は御勝手に被成候樣申達候處、大學殿御請取に而、尤御受取紙面取申候事。

一、御弓矢方爲御用、於京・大坂等相求候品々、向後御射手裁許斷次第、夫々於右所々調上可被相渡候。以上。

癸丑二月廿八日　　玉井市正　印
　　中川式部　印
　　前田勘解由　印
　　津田玄蕃　印
　　在江戸　前田修理　印

會所御役人中

二九　絹目形及手綱布丈尺之儀覺

覺

一、極上之絹一疋之糸目　百五十目より百四十目迄
一、上絹一疋之糸目　百四十五匁より百三十五匁迄
一、中絹一疋之糸目　百三十目より百二十目迄

右庚子七月廿六日改

御纏之寸尺覺

一、上八講布　一匹六切
但、御獻上・御召共に一筋に付金さし一丈一尺二寸
一、中八講布　一匹七切
但御進物、一筋に付金さし九尺六寸

三〇　料紙及墨之儀覺

一、反古相渡漉返紙に申付候手間料等之覺

覺

一、一貫目　反古
内
三百三十目　減目
三百三十目　手間料可引
三百四十目　紙漉紙可上
一、一貫目　大奉書切くづ
内
三百目　減目
三百目　手間料可引
五百目　並杉原に漉可上

右會所に而先年相極、二俣に帳面に記遣置候事。

紙直段付

一、上之中折一束に付　（直段缺ク）
一、中之中折一束に付　一匁四分二厘八毛　年により少々直段高過不足有之候
一、下之中折一束に付　一匁三分一厘八毛
一、紙漉杉原　七匁
一、薄墨紙　二匁五分
一、並杉原　十二匁八分

墨直段付

一、朱墨　一挺　大形二匁　中形六匁
一、丹墨　同　二分
一、並墨　同　一分四厘五毛
一、同　二挺形二分九厘